

春季教育実習

1. 目的と概要

1.1 目的

春季教育実習の目的は、教案の作成、授業の準備と実施、問題点の発見という日本語教育の現場で行われる日本語授業の一連の過程を実際に体験し、それを客観的に観察することで、日本語教育にかかわる様々な項目や教室で生じる問題点を自ら学ぶことである。また、実習生は自分の授業だけでなく、他の実習生或いは経験を積んだTAの授業を積極的に見学し、様々な視点を養い、各自の成長を目指す。

<服部明子>

1.2 春季集中日本語講座の概要

名称： 名古屋大学留学センター2006年度春季集中日本語講座

開講期間： 2006年2月13日（月）～ 2006年2月28日（火）

実習クラス： 初級Ⅱb

対象： 名古屋大学に在籍する外国人留学生
(全学向け日本語講座6ヶ月コースを修了した学生、
短期交換留学受け入れプログラムの学生など)

学習者の出身国： 中国(3)、フィリピン(2)、ポーランド(1)、エルサルバドル(1)、
ヨルダン(1)、フランス(1)

登録学習者数： 9名

使用教科書： A Course in Modern Japanese [Revised Edition]Vol.2 (2002)
名古屋大学日本語教育研究グループ編 名古屋大学出版会

<戸川三千代>

2. 実習内容

春季実習は名古屋大学留学生センターの「春季集中全学向日本語講座」のうちの「初級Ⅱ」の1クラス¹の一部を実習生が担当するという形で行われた。メインの教師はTeaching

¹ 留学生センターの協力により「初級Ⅱ」に実習クラスとして「初級Ⅱb」を開講していただいた。「春季集中全学向日本語講座」の参加希望者はプレースメントテストにより所属するクラスが決まる。「初級Ⅱb」に編入された学習者には、実習クラスであることを了承してもらった上で、参加してもらった。(実際の交渉は鷲見幸美先生が担当された。)

Assistant (以下TA) 4名であり、各TAを中心に、実習生9名は2名ないし3名にわかれ4つのチームが作られ、チーム毎に担当の課が割り振られた²。

授業は1コマ(90分)をTAと実習生で担当するのが基本スタイルで、実習生は最低でも2回の授業が課せられた。なお、チームの方針、担当する課の学習項目や内容によりTA・実習生の時間配分は異なる。表1に全体の時間割を示し、表2に実習生が担当した課と学習項目を示す。

なお、今回の試みとして2月24日3時限には「アクティビティー」が設けられ、TA・実習生の全員で運営する実践的コミュニケーション活動が行われた。

授業の詳細については次節3で報告する。

<田中典子>

表1 留学生センター春季集中全学向日本語講座「初級Ⅱb」コース時間割

	日付	1限(9:00~10:30)	2限(10:45~12:15)	3限(13:15~14:45)
1	2/13 (月)	オリエンテーション ³	【11課】 前・あと・時、～ば(条件)	【11課】 ～ばいいです、～ければ
2	2/14 (火)	【11課】 ～こと、かもしれない ～なければならない	【11課】 ～ながら 11課会話	【12課】 たら(条件) たら(発見・助言)
3	2/15 (水)	【12課】 ～て(理由) 可能形・疑問詞+でも	【12課】 ～ために(目的) ～ておく・～てみる	【12課】 ～ことができる・～まで・～について
4	2/16 (木)	【13課】 する・なる(変化) 比較文・最上級文	【13課】 やすい・にくい ～と(条件)	【13課】 活動:買い物に行く(道聞き・買い物)
5	2/17 (金)	【14課】 名詞修飾	【14課】 ことになる・ことにする ～てしまう	【14課】 つもり・はず 活動:誘い
6	2/20 (月)	【15課】 自動詞・他動詞 ～てある	【15課】 受身(ひと・もの)	【15課】 活動:スピーチ
7	2/21 (火)	【16課】 尊敬語	【16課】 謙譲語 やりもらいの尊敬	【16課】 そうだ(伝聞・様態) 活動:訪問

² プレースメントテストが終わるまで、どのような学習者が何名集まるかなどの情報は得られない。これまでの実績、留学生センターの情報などから、シラバス決定時、6か月コース出身者が中心になるという予測がたてられた。6か月コース出身者にとっては、「初級Ⅱb」は『CMJⅡ』を復習するクラスになる。『CMJⅡ』は11課から20課までの計10課で構成されており、チーム毎に二課ないし三課を担当した。

³ オリエンテーションは鷺見先生が担当され、TA・実習生も参加した。

8	2/22 (水)	【17 課】 によって、「～よう」普 通体会話、ようとする	【17 課】 ～ようと思う ～てくれる	【17 課】 ～てくれる、～てくだ さる、～てあげる、～ てさしあげる、お～す る
9	2/23 (木)	【17 課】 てもらい、ていただく、の に、そんなに～ない	【18 課】 ～ようだ (推量) ～ても (逆接)	【18 課】 ～って A・B・C・D 見える・聞こえる
10	2/24 (金)	【18 課】 ～らしい (推量)	【19 課】 ～ようだ(様態) 活動：俳句を作る	アクティビティ 《実践的コミュニケー ション活動》
11	2/27 (月)	【19 課】 使役・使役受身 授受・依頼・許可	【19 課】 ～てくる・～ていく 間接疑問・複合動詞	【19 課】 活動：インタビュー
12	2/28 (火)	【20 課】 禁止・命令 ～ように言う・と言う	【20 課】 ところ・ものだ・まま	【20 課】 活動：ディベート

表 2 春季実習 実習生担当学習項目

	実習生	時	課	学習項目
1	宮島良子	2/14 (火)	11 課	～なければならない
2		2/22 (水)	17 課	～てくれる・てくださる・てあげる
3	蔡親平	2/14 (火)	11 課	～ながら
4		2/22 (水)	17 課	～ようと思う
5	田中典子	2/14 (火)	12 課	たら(発見・助言)
6		2/23 (木)	18 課	～って A・B・C・D
7	近藤麻子	2/15 (水)	12 課	可能形・疑問詞でも
8		2/24 (金)	18 課	～ようだ(様態)
9	戸川三千代	2/15 (水)	12 課	ておく・てみる
10		2/23 (木)	18 課	～ようだ (推量)
11	服部明子	2/16 (木)	13 課	～と (条件)
12		2/27 (月)	19 課	授受・依頼・許可
13		2/27 (月)	19 課	活動：インタビュー
14	孔祥明	2/20 (月)	15 課	～てある
15		2/20 (月)	15 課	活動：スピーチ
16		2/27 (月)	19 課	～てくる・～ていく

17	中島忍	2/17 (金)	14 課	～てしまう
18		2/21 (火)	16 課	そうだ(伝聞・様態)
19	許恵文	2/21 (火)	16 課	謙譲語
20		2/28 (火)	20 課	ように言う・と言う
21	田中+近藤・戸川	2/24 (金)	活動	俳句を作る
22	中島+許	2/28 (火)	20 課	活動：ディベート
23	TA2 名+実習生 7 名	2/24 (金)		実践的コミュニケーション活動

※配列は五十音順ではなくチーム毎で、初回の授業の早い順番で並べてある。

※ 21、22 は授業担当は先頭に名前がある実習生。+以下は補佐の同じチームの実習生。

3. 実習授業報告

実習終了後、実習生は自らが行った授業について、実習の様子を撮影したビデオや使用した教案、TA や授業見学者からのフィードバックなど、実習の際に得た様々な材料をもとに、授業を振り返った。以下に実習授業の報告として、各自の授業内容と反省点を挙げる。

<服部明子>

3.1 授業報告

表 2 の通し番号 1 から 20 に対応の授業報告を以下に行う。

実習生氏名：宮島 良子

実習日： 2月14日(火) 1限 <授業内容：第11課> ・学習項目 (かもしれない) (なければならない) 導入、ドリル練習、発展練習 (なければならない) が表す、A 法律で決まっている「義務」/B 個別の規則やルール/C 社会的常識や慣習からの「義務」/D 個人の判断からの「義務」の状況を提示し、(なければならない) を使って表現させた。(なくてはいけない:9課で既出)
実習日： 2月22日(水) 3限 <授業内容：第17課> ・学習項目 (てくれる) (てくださる/てあげる) 導入、ドリル練習、発展練習 ピンクのハート型の紙を使用し、授受表現の理解を促した。 (～てくれて、・・・) のように、複文でも使用できるようになることを目標とした。 (～てあげる) をむやみに使用しないように気をつけるように注意を促した。

＜授業の反省＞

実習を通して自分自身が「日本語の授業」のためにどういう準備をしているかを客観的に捉えなおすと同時に、日本語教師の養成について考えることができた。

教案を作成する際に、CMJ1、2の教科書分析を行い、自分の担当する項目より前にどのような文型、語彙、表現を学んできているのかということを調べ、授業内での発話、特に説明に使用する言葉に未習のものがないよう気をつけ、例文もできるだけ自然で、かつ現実的に使用する可能性があるもの、耳にする可能性があるものにするように心がけた。授業見学を通じて、当該クラスの学習者の語彙の定着がよくないということがわかったため、自分が授業中に使用する語彙は絵カード及び、彼らの既習の言葉でそれらが説明できるよう用意しておいた。それでも学習者の反応が悪い場合のために、すぐに英語訳を提示できるように準備しておいた。準備段階では「未習語・既習語」を意識したが、第二言語環境下での学習の場合、学習者は授業以外の場から得た様々な語彙や表現を教室に運んでくるので、柔軟に対応できるように心がけた。

教師養成のあり方については、各自が実際に授業を行う前に教案や模擬授業を行ない、「学習者はその説明で理解できるのか」「その絵カードでこちらが意図した言葉がでてくるか」といった学習者の視点を意識し、様々な工夫やアイデアを共有しあうことの重要性を痛感した。完璧な授業など存在しないのであるから、忌憚のない意見を言い合いたかったが、教授経験があるということで、他の実習生に遠慮されてしまった感があり、双方向の意見交換が十分でなかったように感じた。意見を言いにくくさせるような威圧感のようなものを与えていたのだとしたら、申し訳なかったと思う。

授受表現を使用する際の自動詞、他動詞の問題など、学習者が混乱するであろうと予想可能な問題について、時間を気にするあまり、整理し直して提示し練習させるということを省いてしまった。これは優先順位の判断を間違えてしまったと反省している。また、今後の一番の課題として、どちらかという学習者のテンポに合わせた授業になる傾向があるので、もう少し、教師のテンポに巻き込めるような、技術を身に付けていきたい。

実習生氏名：蔡 親平

実習日： 2月14日(火) 2限

<授業内容：11 課>

学習項目：「～ながら」

項目機能：「～ながら」ある主体（同じ動作主）が動作 Q を行うときに同時に別の動作 P を行うことを表す。

導入手順：

1. 簡単な自己紹介
2. 「～なければならぬ」という項目を復習し、「～ながら」を導入する。
(文字カードを使用する)
3. 「～ながら」項目の意味機能の説明
4. ドリル練習（実物を使用する。本、ラジカセ、雑誌など）
S→T (教師がその動作をし、学生に言わせる)
S→S (練習に使う短文を用意する)

実習日： 2月22日(水) 2限

<授業内容：17 課>

学習項目：「と思う」「と思っている」

使用機材：パソコン・OHP（パソコンを OHP に接続してホワイトボードに投射）

使用ソフト：パワーポイント

項目機能：

「と思う」

- ・話し手の意志や願望を表す場合（～（よ）う/たい+思う）
- ・話し手の判断・断定（意見・考え）を聞き手に伝える場合（「判断+と思う」）

「と思う」と「と思っている」の違いは、「と思う」はその場での判断を表す傾向が強いに対し、「と思っている」は話し手がある程度継続して持っている判断を表す傾向が強い点になる。

導入手順：

1. TA との会話を見せる
2. その会話を生徒に読んでもらう
3. 項目の意味機能の説明
「と思う」 (POWERPOINT の絵で説明)
「と思っている」 (POWERPOINT の絵で説明)
4. 動詞の意志形の変換練習
5. FORM の練習
6. タスク（インタビュー）

＜授業の反省＞

1. 「～ながら」

- ・ 授業の優先順位、後で接辞の形式を出したので、順位が混乱していた。
- ・ 教案の書いたことと違う、自分が緊張し、その場のことがコントロールできなかった。学習者のペースに乗ってしまった。
- ・ 学習者の語彙をあまり注意していなかった。自分の思い付いた語彙で説明した。学習者が余計分からなくなった。
- ・ 接辞の形式が最初に出すべきだ。

2. 「と思う」「と思っている」

- ・ 導入の時時間がかかりすぎ、ある学習者と単独練習しすぎた。
- ・ 今の段階で「～と思っている」を使う機会が少ないため、第三人称を導入することによって学習者が混乱しやすいように思われる。
- ・ POWERPOINT を使用し、文法項目を説明したが、いい例とよくない例があった。適当な絵を探す工夫することが必要だと思われる。
- ・ 自分の視線がある生徒に頼りすぎ、あまり注意を払っていなかった生徒がいた。
- ・ 時間の配分がうまくできなかった。インタビューには時間をかけてやるべきなのに、時間がなかったから簡単に終わった。

以上は 2 回授業を渡り、それぞれの反省点だが、全体の反省点として、学習者の現有レベルにはうまく合わせなかった。そして、語彙の使用とかで学習者がさらに混乱したような感じした。また、授業の展開においてはまだまだ足りないという実感もあった。スムーズに授業の段階を踏んでいけなかった。

実習生氏名：田中 典子

実習日： 2月14日(火) 3限後半

＜授業内容： 12 課＞

学習項目

- B.2. V-たら、～V-た 「たら」の発見の用法
- D. V-たらいいです/V-たらどうですか/疑問詞+V-たらどうですか
「たら」のアドバイスの用法

授業構成

3 限前半でやった仮定法の「たら」を使った文で導入開始。次に新しい用法の発見の「たら」の使用場面を作り、言語化したのち、板書して仮定法との後件の違いの

文法説明を行う。その後、絵カードで文脈を提示し、「たら」文を学習者に完成してもらう。この段階で20分経過したため、発見の「たら」の会話練習はカットする。

次に後半の「たら」のアドバイスの用法にうつった。11課「ば」のアドバイスの用法で慣れているためか、導入時に教師側がアドバイスをもとめる文「疑問詞+Vたらいいですか」でたずねると、学習者が「Vたらいいです」と答えてくれたのでそれを板書し、アドバイス用法について軽く説明した。その後、教師がたずね、学習者が答えるQA練習をした。拡張練習「～んですが、どうしたらいいですか」を学習者に言ってもらい練習は時間の関係でカットした。ここまでで10分費やした。

最後に残り15分をきったところで、見学者の実習生5人に協力をお願いして、学習者の会話の相手になってもらい、お互いの国を訪れる際のアドバイスなどを聞きあってもらった。その際自由会話とし、プリントなどは用意しなかった。最後の5分でグループごとに代表者に発表してもらった。

実習日： 2月23日(木) 3限前半

<授業内容： 18課>

V Usages of ~って

- A ~って(=と) 引用の「～って書いてある／言っていた」
- B ~って(=という) 定義の「○○って」
- C ~って↑ 聞き返しの「○○って。」(上昇イントネーション)
- D ~って↓ 伝聞の「<普通体>って。」(下降イントネーション)

授業構成

導入:TAの方に協力していただいてスキット仕立てでA~Dのすべての用法を盛り込んだ会話を実演。場面は2人が友人を待っているところで、一人の携帯に遅刻の友人から電話が入り、通話後その内容をもう一人に伝えるもの。その後、個々の「って」の練習にうつった。

- (1) 用法A: 状況を設定した後、教師が質問し、バス停の時刻表や、図書館の会館日程表を見て「って書いてある／って言っていた」を使って答えてもらう練習
- (2) 用法D: 伝言を伝える練習
- (3) 用法B&C 自分の好きなものをみんなに紹介する文を作ってもらい、発表。聞き手側も「って」を使って応答する設定にした。その際、以下のような文をプリントして渡し、文作成の時間をとった後、発表にうつった。発表は前に出て一人ずつした。

<発表者>-----

- ①今から、(私の好きな食べ物) について話したいと思います。
- ②わたしは (しゃぶしゃぶ) が好きです。
- ③みなさん、(しゃぶしゃぶ) って知っていますか。
- ④ (しゃぶしゃぶ) というのは、(なべりょうりのひとつ) です。
冬に食べます。...

<聞き手>発表者の③の質問にこたえて-----

知らない場合：いいえ、知りません。(しゃぶしゃぶ) ってなんですか。

知っている場合：はい、知っています。(しゃぶしゃぶ) って (おいしい) ですね。

<授業の反省>

その形式が発話される文脈はどんな状況かを考えすぎるあまり、教師対学習者というパターンで場面を一つずつ提示するのに時間がかかりすぎた。復習クラスであるということ、レポートが必要な学習者ではないという意識も働いたため、ドリル練習などはしなかったが、かえてそのため、個々の学習者の発話の機会が少なくなってしまうていた。予定していた運用練習も時間の関係でカットすることが多く、導入とそれぞれの練習の型の時間配分がよくなかった。

実習生の話し方であるが、文の説明については、地の文の途中で説明の文がかなり混じっており、学習者には区別がしにくくわかりにくかったと推測される。また、説明でありながら、せりふも混じって演技しているため、学習者の理解が追いついていないか疑問である。話す速度も普通で、あまりコントロールしていなかった。用いたフィードバックは学習者の言い間違いを正確な文で言い直すという暗示的フィードバックがほとんどだった。学習者の発言はなるべく全体の場に取り上げたいという意図から共有化のためと信じて繰り返しが多かった。

また、教師のコントロールがきつい授業であり、学習者同士のタスクがなかった。振り返りの授業で指摘を受けたように、いつも教師が導入する必要はなく、まず学習者同士にロールプレイをしてもらって、そこで足りない部分があれば説明をつけくわえ、問題がないようであればすぐ練習に入るという構成も考えられた。復習クラスだという意識が学習者のレベル以上のタスクを設定してしまっている反面、授業の構成は初めて学ぶように構成するなど、思い込みを排除できていなかった。

授業構成については、テキストの学習項目を学習者に合わせて序列をつけたつもりが、まだまだそれができていないことがこの実習で明らかになった。このレベルの学習者にとって学習項目は「聞いてわかればいい用法」なのか「自分で使えたほうがいい用法」なのかという吟味が足りなかった。つい「日本で生活しているのだから彼らはいろいろ耳にするし、初級で紹介されているものはなんでも使えたほうがいい。」と欲張ってしまいがちだが、同じ課で並べて紹介されているからといって

難易度が同じというわけでもないし、重要度も同じではない。頭では理解できていても教室で実現されていなかった。

以上が 2 回の授業を通してみた筆者の問題点である。課題は、学習者のレベルが高いからといってことばに頼りすぎず、キーワードなどを視覚化あるいは記号化して、学習者の理解を助けるように授業を構成すること、教師の発話を減らし学習者の発話量を増やすことである。

「使用」の練習については、レベルに合うキューや、使えるシンプルな場面の提示、そして繰り返しの重要性を感じた。場面の多様性が必ずしも理解の助けになるわけではなく、繰り返しは決してマンネリではないこと、共通の場面からも多様性のある発話につなげられることに気付かされたので、これを実践していきたい。

実習全体では、実習生同士、あるいは TA の方の授業を見学していく中で、教える側の授業内容の連携の大切さを改めて感じた。今回の学習者のようにレベルの高い学習者でも習ったことが一回で使えるようにはならないからこそ、各教師がその前に行われてきた授業内容を知り、既習項目を積極的に使って文を構成していくことを意識しなければならないと感じた。そうすれば、場面に応じての表現が豊富になっていくからである。担当文型だけに焦点をあてすぎることはときに不自然な発話を生じさせることになる。

今回の実習でこんなことがあった。ある学習者が実習が終わるころ、学習項目ではない表現を非常に上手に使いこなせるようになっていたのだ。これはある TA の方がある状況になると発する言葉を観察して、学んでいたということが後でわかった。場面と言葉が結びついて習得につながったよい例を見せてもらったわけであるが、こういったことを授業でもっとたくさん起こせるようになればと思う。

最後に本実習は大変恵まれた環境での実習であった。学習者が一人も欠けることなく春季集中コースを終えられたのは、学習者の方の人間性と、関係のよさのおかげだったと思う。学習者同士の関係がいいクラスはいい刺激を与えあい、能動的学習を促進できるという見本を見せてもらった気がする。

実習生氏名：近藤 麻子

実習日： 2月15日(水) 1限

＜授業内容：12課＞

・学習項目：可能形「られる」、疑問詞＋「でも」

可能形の導入、可能形の作り方、可能形の練習、疑問詞＋「でも」の導入、応用練習

可能形の練習では、地元のデパートの案内を見せ、「〇階では～られる」という作文をさせた。応用練習では、学習者の出身国(地)では法律上誰が何を許可されているのか作文させた。

実習日： 2月24日(金) 1限

＜授業内容：18課＞

・「ようだ(様態)」「～のようなN(様態)」「～らしい(様態)」

「ようだ(様態)」の導入・練習、「～のようなN(様態)」の導入・練習、「～らしい(様態)」の導入・練習、応用練習

練習では、絵や写真を見せ、新出文型を使って説明させた。応用練習では、新出文型を使って遠まわしな表現をさせようと試みた。

＜授業の反省＞

全体的に、既出単語と未習単語の区別なく語彙を選択してしまったので、学習者にとって非常に理解しにくい授業になってしまった。また、練習は行ったが、いきなり一人ずつ作文をさせるという応用型の練習しか行っておらず、ドリル練習が全くなかった。新出文型がいまいち定着しなかった。ドリル練習は学習者にとって退屈だという先入観があったのだが、新出文型を定着させ、学習者に安心感を与えるというドリル練習の長所を授業に取り入れるべきだった。

具体的な失敗で特に大きなものは、以下の通りである。まず、練習の作文素材の一つに政治的なものを使用したが、例文にしにくいものを練習の素材にするべきではなかった。なお、関係地域の出身者がクラスにいないことや、学習者の性格などは考慮して使用したので、大きな問題は起こらなかった。

その他、18課の応用練習では、「日本的な会話」と称して遠まわしな表現を作文させようとしたが、主に三つの原因のために全くの失敗に終わった。①使用した新出文型は遠まわしな表現をするための文型ではなかった。②何が「日本的な会話」なのかという判断基準に客観性がなかった。③政治的素材と同様、表現させようとした内容が例文にしにくいものだった。

最後に、この実習を通して最も深く考えさせられたことは、知識や教授法以前の問題であるが、良い語学教師であるための前提条件の一つに、目的言語に対するある種の愛情を持っていることが含まれるのではないかということである。語学教育を

精神論的な立場で議論するべきではないと考えられるため、教師の「情熱」を資質として考慮することは避けるべきかもしれない。しかし今回の実習では、自分の授業とベテランの TA の授業を比較した際、教材研究や授業構成の検討等、準備の段階において、教授法・日本語文法に対する知識や教授経験の差だけでは説明のつかないギャップが特に浮き彫りになったので、今後活かすべき反省の一つとして敢えて言及したい。言語が文化と切り離しえない存在である以上、その言語を話す文化に対する愛着が言語の習得を助ける、という学習者に言えることと同じことが、教師についても言えるのではないかと考える。

実習生氏名：戸川 三千代

実習日： 2月15日（水） 2限後半

＜授業内容：12課＞

項目は「～ておく」と「～てみる」の2つ。「準備」の～ておく」の導入とその形の練習を簡潔にした後、定着を図るため2種類の使い方の練習をした。その後さらに、「試し」に～てみる」の導入とその形の練習をできるだけ手短にしたのち、デパートでのショッピングの場面を想定した実生活でも役立つような使い方の練習を一つした。そして最後に生徒からの質問等への応答でこの日の授業を締めくくった。

実習日： 2月23日（木） 2限前半

＜授業内容：18課＞

項目は「推量」の「～ようだ」と「～みたいだ」の2つ。「～ようだ」の寸劇仕立ての導入のあと、形の練習はせず直ぐに絵カードを使った一つ目の使い方の練習をし、さらに一部分だけ見えるケースの中に入れた色々なもの（ミニサイズの動物のぬいぐるみなど）を手探りで推測してもらってゲーム感覚の二つ目の使い方の練習をした。このゲーム感覚の使い方の練習に時間をかけすぎたため、二つ目の項目「～みたいだ」を駆け足でやらざるをえなかった。また、最後のタスクシートにも十分な時間がかけられなかった。

＜授業の反省＞ ①使い方の練習等でキューを出すときは、（私のような板書が速くない者は）口頭かあらかじめ紙に書いておくべきだと反省しました。私は、「～てみる」の使い方の練習のとき、ホワイトボードにキューを書くのに少々手間取ってしまい生徒さんたちを退屈させてしまったみたいでした。②時間配分については、二つ項目がある場合、一つ目の項目に時間をかけすぎ、残りのものが予定していた通り十分に出来なかったこともあったので、もっと気をつけるべきでした。③あと、生徒さんたちはどんどん自由に話したがっているのに、私は生徒さんからの発話が遅れると緊張し不安にかられたため、あまりにも長く説明をしすぎてしまいました。皆さんとてもいい方たちで、かつお互い仲が良く、ヒントを出し合ったりしているので、私があんなに口を出すべきではなかったと、反省しきりです。④ゲーム感覚の使い方の練習は、結局、『名詞+のようです』しか定着できないのに、あんなに長い時間を割くべきではありませんでした。途中から生徒さんたちを退屈させてしまったみたいでした。⑤また、二月十五日の一回目の実習のときは不安と緊張のあまり絶えず教案を見たり手にしてばかりいたと思います。もっと教案を事前に頭に入れておくべきでした。以上が、私が春の教育実習中に感じた大きな五つの反省点です。

実習生氏名：服部 明子

実習日： 2月16日（木） 2限後半

＜授業内容：13課＞

学習項目：「～と（条件）」

学習目標：「～と」の用法と使い方を学ぶ。

- I. 導入（絵カード・レアリア使用）
- II. 文法説明
- III. ドリル練習（文字カード・絵カード使用）
- IV. タスク

1組2人のペアで想像上の機械を考え、機械の操作を「～と」を使って説明する。

実習日： 2月27日（月） 1限後半

＜授業内容：19課＞

学習項目：「許可：～させていただけませんか」

学習目標：許可を求める機能発話の定着を図り、相手によって丁寧度を変える。

- I. 導入
場面を設定した上で例を提示し、文法項目を導入。
- II. 文法説明と板書

Ⅲ. ドリル練習（文字カード使用）

Ⅳ. 会話練習

2名が2発話ずつの会話練習。

Ⅴ. タスク（プリント使用）

モデル会話の提示、それに沿ったロールプレイ。

実習日： 2月27日（月） 3限

<授業内容：19課>

学習活動：日本人へのインタビュー

学習目標：相手とのやりとりを楽しみ、より円滑に会話できるようになる。

I. インタビューの際の表現を確認する

実習生とTAでインタビューのモデルを示し、QAとプリントで表現を確認。

II. 質問を考える

学習者に2人1組でインタビューすることを伝え、ペアを作る。それぞれのペアでインタビューの内容を考え、インタビューシートに質問項目を書き入れてもらう。

III. インタビュー

IV. 発表

<授業の反省>

春季実習で行った授業では、実習生が授業をコントロールすることが多く、その練習内容から学習者の自由な発話を制限してしまうことや、一つの学習項目から次の項目へ移る際、段階を踏まず唐突に移行してしまうことがあった。

また、提示する例や練習量が少ないなどという準備不足が目立った。フレキシブルな対応をするためには、その場の学習者の状態に応じて練習・説明を適切に組み合わせられるよう、事前に様々な事態を想定し十分な準備をすることが欠かせないと知りながら、教案を作成する際の基本的な部分が疎かになっていたことを認識するとともに、改めて反省した。

さらに、普段は「何のためにこの練習を行うのか」という視点を持つべきであると考えていたが、客観的に授業を観察した際には、「練習のための練習」「活動のための活動」が見られたということも反省すべき点であった。客観的に自分の行動を把握することは困難ではあるが、常に意識することで改善していきたい。

授業全体を通しては、フィードバックの少なさが目立った。これは、どのようなフィードバックを行えばよいのか、自分自身が判断できなかったことから、無意識的にフィードバックすることを避けていたといえる。しかしながら、回避の態度は今後日本語教師を続ける上で非常に大きな問題であるだろう。そのため、この問題については、夏季実習の研究レポートで自らの課題として取り上げた。詳細については研究レポートを参照していただきたい。

実習生氏名：孔 祥明

実習日： 2月20日（月） 1限後半

＜授業内容：15課＞

学習項目：「～てある」

学習目標：「～てある」の用法と使い方を学び、行為の結果の状態などを述べられるようになる。

- I. 「て」フォームの復習
- II. 導入（自作絵カード）
- III. 文法説明と公式の提示
- IV. ドリル練習（教科書、しりとりゲーム）
- IV. 会話、応用練習（話題：出かける前のチェック、プリント使用）
2人1組で練習、その後各組みに発表してもらう。

実習日： 2月27日（月） 2限前半

＜授業内容：19課＞

学習項目：「～てくる、～ていく」

学習目標：補助動詞としての用法を学ぶ。

- I. 導入1と復習
本動詞としての用法を復習する。（移動の手段、継起など）
- II. 導入2（自作気温グラフ、絵カード）
- III. 文法説明（継続や徐々の変化）
- IV. ドリル（教科書 P266）
- V. 応用練習（プリント使用）
（話題：最近変わってきたことについて、2人1ペア）

＜授業の反省＞

- ・一方的に文法を説明する授業になってしまい、学生に発言させるチャンスが少なかった。
- ・事前準備が不足だった。授業中に起こりうる事態を想定し、事前に対策を考えるのができなかった。そのため授業のときに、予想以上に緊張してしまい、ミスが目立った。さらに、学生たちの誤用に気づき、訂正することができなかった。
- ・文法項目を教師が一方的に説明するのではなく、どんな場合に使うかという場面提示を明確しなかった。場面提示に工夫しなくてはいけない、と反省した。
- ・時間の配分を上手く把握できなかった。学生たちの語彙量の現状に十分意識しなかったため、教案どおりに進められなくて、一部分をカットするしかなかった。

実習生氏名：中島 忍

実習日： 2月17日（金） 2限後半

＜授業内容：14課＞

学習項目：「～てしまう」

学習目標：「～てしまう」の完了の用法と残念な気持ちを表わす用法を学ぶ。

I. 導入（完了の用法）

教師と他の実習生との寸劇を見せる。

II. 簡単な文法説明

III. さらなる例の提示

「書いてしまいました」、「掃除してしまいました」、「食べてしまいました」

IV. ドリル練習

文字カードで「～しまいました」の形を作る練習。

V. ペアワーク（プリント使用）

1人が相手を誘う。誘われた方は「～しまった後でしましょう」と言う。

VI. 発表

ペアワークで練習した会話を、ペアを変えて発表する。

VII. 導入（残念な気持ちを表わす用法）

バスに乗り遅れた人の絵を見せて「バスが行ってしまいました」という文を引き出す。

VIII. 練習

絵を見せて「～てしまいました」を使った文を引き出す。一人ひとり指名していく。

IX. タスク

「私はよく～てしまいます。」を使って作文。

X. 発表

一人ひとり、作った文を発表。

実習日： 2月21日（火） 3限前半

＜授業内容：16課＞

学習項目：「～そうだ」

学習目標：「～そうだ」の伝聞の用法と様態の用法を学ぶ

I. 導入（伝聞の用法）

教師と他の実習生で寸劇。

II. 簡単な文法説明

III. さらなる例の提示

IV. タスク

まだ誰にも言っていないことを一文書く。すべての紙を一つの箱に入れ、一人ひとり紙を引き、その文に「〇〇さんは～そうです」をつけて発表する。

V. 導入（様態の用法）

絵を見せて「～そうです」を使う場面を提示。

VI. 接続の形の確認

VII. タスク

各々の友達（このクラス以外）の絵を描き、それを発表する。他の学習者は、その絵の友達について、様態の「～そうです」を使って表現する。

<授業の反省>

2 回の授業を通して反省すべき点はまず、学生の発話量が少ないということである。教師が一方的に話し、学習者はそれを受身で聞いているという時間が多かった。また、語彙のコントロールが出来ておらず、難しい語彙、抽象的な語彙を多く使っていた。さらに、授業にメリハリがなく、学習者が「今、何をしているのか」がわかりにくい授業をしてしまった。特に学習項目が移行するとき（伝聞の「～そうです」から様態の「～そうです」に移るとき）など、いつの間にか違う項目になっているということが多かった。

また、内面的な問題もあった。教師としての自信がなかったため、学習者とまっすぐ向き合うことができないという点である。この問題は、学習者の質問にうまく答えられないということに留まらず、皆の前で質問に答えられないということに私自身が抵抗を感じていたため、より根深いものとなっている。このような私自身の問題点があったため、学習者が皆の前で発表したときなど、なんのフィードバックもせずに次に移ってしまうこともあった。また、学習者の疑問を教師との 1 対 1 のときに解決してもらおうとしたりしたため、（ペア）ワークの時間が必要以上に長くなってしまったということが起きていた。

その他、授業の進め方や、教案の立て方についても、先生・先輩方・同期にたくさんのお有益なアドバイスを頂いた。これから、自身の問題点を見つめ、改善していきたい。

実習生氏名：許 惠雯

実習日： 2月21日（火） 2限前半

<授業内容：16 課>

学習項目：謙譲語

- ① レギュラー動詞：お+Verb(base)+する
- ② イレギュラー動詞

学習目標：

謙譲語すべてを上手に使えるようにするのではなく、日常生活で謙譲語が特に必要

な場面を具体的に提示し、その場面に相応しい謙譲語の文型と表現のみ覚えることを目標とした。

授業の構成：

- ・ 絵カードで「謙譲語」の使用場面と授業前半の「尊敬語」の違いを説明する
- ・ レギュラー動詞の変換ルールを提示する
- ・ 単語カードを使用し、変換練習を行う
- ・ 具体的な場面を三つ提示し、ロールプレイする
 - ① 発表の場面：「今日私は～についてお話しします」
 - ② 先生の荷物を持つ場面：「おかばん、お持ちしましょう」
 - ③ 社長を車で送る場面：「車でうちまでお送りしましょう」
- ・ イレギュラーな謙譲語(特別な謙譲語)の一覧を紙に書いて提示し、ドリル練習をする
- ・ イレギュラーな謙譲語を使い、自己紹介をしてもらう
→自己紹介文の質問紙を配り、その中の動詞を謙譲語に変換して記入してもらう
→教室の前に立ち、皆に向かって発表してもらう

実習日： 2月28日(火) 1限後半

<授業内容：20課>

学習項目：要求の引用

- ① V(dictionary/ない)のように言う
- ② V(imperative)と言う

学習目標：

誰かに命令する・要求することを練習する。命令・要求されたほうがその内容を第三者に伝える際にこの form を使って引用できるようになる。

授業の構成：

- ・ 導入：授業前半に教わった命令形を復習
- ・ 「～と言われた」の文型の導入：「小さい頃によく誰に何を言われたか」を聞き、代入練習として口で言ってもらおう。
- ・ 「～ないように言われた」の文型の導入：
→教室内、してはいけないことを言ってもらおう
→練習：AさんがBさんに「～しないでください」と命令する
Bさんに「私はAさんに～ないように言われました」と言ってもらおう
- ・ 「～ように言う/言われる」の文型の導入：
→練習：教科書の288と289ページの練習を使用し、代入練習と会話練習を行う。
- ・ ゲーム：
目的→①新しい単語を教える
②教師の「○○を取ってきてください」という指示の聞き取り練習をする

③「先生に〇〇を取ってくるように言われました」という文型を練習する

<授業の反省>

一回目の授業では導入部分に「この本は私がお書きしました」というような間違っただけの例文を提示してしまった。また、謙譲語の変換ルールを教えるため、単語カードを使い、練習を行ったが、選択した単語は「お片づけします」のような適切ではないものがあつた。学習者がそのまま覚えてしまうと、間違えて使ってしまうことになるので、授業前に教案の確認が足りなかつたと反省している。ロールプレイの練習では、いきなり「お～しましょう」の文型に変えてしまい、どうして「～ましょう」を使うかという説明が足りなかつた。

二回目の授業では学習項目とずれてしまい、「～ように言う」と「～と言う」の学習項目がほとんど「～言われた」の受身文の練習のようになってしまった。教師の指示も悪かつたので、学習者は今何を言うべきなのかととまどう場面もあつた。学習者は教師の質問に対し、教科書を見ないとあまり答えられないことも観察できたことから命令形を辞書形に変換することはまだ慣れていないと考える必要があつた。もっと文型の説明と変換の練習をするべきだつたと思われる。

全体的な反省として、教師自身の日本語能力が低いため、変な例文を出したり、間違つた日本語を話したりすることがよくあつた点が挙げられる。学習者の間違いに気付かずに、授業をそのまま進んでいってしまうこともよくあり、学習者の答えにフィードバックができなかつたことも反省しなければならない。また、一回目と二回目の授業は全部教案通りに進み、文型の提示と場面の設定なども意図どおりにコントロールできた。ただ、実習生の教案では学習者は特定の文型を特定の場面にしか使えないことになる可能性が考えられるので、学習者にもっと発話権を与え、教授内容を広げていくようにすることがこれからの課題である。自分の基礎能力をもっと磨き、もっといい授業ができるように頑張っていきたい。

3.2 授業報告Ⅱ

表2の通し番号21から23に対応する活動の授業報告を行う。

実習生氏名：田中典子、近藤麻子、戸川三千代

実習日： 2月24日(金) 2限後半

<授業内容： 俳句を作る>

授業の意図：チームの担当した学習項目の中に、様態の「ようだ」や「みたい」があったので、まとめとして観察した内容を見たまま、感じたままに言語化する俳句を活動として取り入れることにした。

授業構成

- (1) 導入：世界で一番短い詩という説明で俳句を紹介する。17音でできていること、季節のことばを必ず入れることというルールを説明した。
- (2) 季語については季節を感じられることばなら何でもいいということにし、まずは春夏秋冬で連想することばを学習者に言ってもらった。それをホワイトボードを四分割し、季節ごとに板書した。
- (3) 5・7・5のルールを説明。(2)で出たことばを何文字か数える練習をする。拗音、長音などの数え方も例を出して説明する。
- (4) 17課の読解に出てきた「雪とけて 村いっばいの こどもかな」を使って俳句について具体的な例を見ながらリズム、季語、どんな情景を詠んだものか説明する。
- (5) 俳句を作るためのシートを渡し、どんな情景を俳句にしたいかをまず言ってもらい、それを5・7・5にする作業を実習生・TAが手伝った。
- (6) 俳句ができたら、いいものを1つ選び、筆ペンで色紙に清書し、消しゴム判子を押し完成した。
- (7) 一人ずつ発表してもらった。

<授業をふりかえって>

俳句の説明をしているときは、学習者の反応が薄く、心もとなかったが、実際に作る作業に入ったところ、非常に生き生きと取り組んでくれた。

学習者は8名で、実習生3名、TA1名だったため、教師1名が学習者2名ずつをフォローすることができた。全員が時間内に句を作り、なおかつそれを色紙に清書するところまで完成できて、形になるものを残せ、満足度の高い授業になったのではないかと思う。

色紙、筆ペンは実習費で購入してもらった。

学習者の頭文字ひらがな一字の消しゴムスタンプを作り、それで名前の下に判を押ししてもらって完成としたが、この消しゴムスタンプのアイデアは喜ばれていたもので、こちらもうれしかった。

実習生氏名：中島忍、許惠雯

実習日： 2月28日（火） 3限

<授業内容：20課>

活動：ディベート

「男と女、どっちがいい？」というテーマで、2チームに分かれてディベート。

- I. 14課の Reading Comprehension 「男と女、どっちがいい？」を読む（担当：中島・許の TA）。
- II. チームに分かれて意見を出し合う。
- III. ディベートに必要な表現の導入。
- IV. ディベート。
- V. どちらのチームの主張が良かったか投票、開票。

<授業の反省>

生まれ変わったら男性がいいとする学習者が予想よりも多く、女性がいいとするチームの主張が弱くなってしまった。ディベートを授業に取り入れる場合、このような問題は多々起こる。これからは、このような問題にも配慮し、なるべく偏りのないテーマを選ぶとともに、意見が偏ってしまった場合にどうするかをしっかりと考えていきたい。

さらに、ディベート授業の教師側の準備が足りなかったため、学習者から飛び出す主張を教師が裁けず、全体的に締まりのない授業となってしまった。今後ディベートを授業に取り入れる際には、学習者から出てくるであろう主張を予想し、どのようにまとめていくかを考え、実践していきたい。

TA2名+実習生7名

アクティビティ： 2月24日（金） 3限

<実践的コミュニケーション活動>

「ミッションインポシブル」と題し、4つのグループに TA が考えた「ミッション」が封筒に入れられて手渡された。グループは前もって TA によって決定されており、当日の出席者に合わせて学習者2名につき実習生2名ないし1名の構成になった。封筒の中身の指令には①ある場所へ行くこと、②そこで遂行しなければならないことが書かれている。4グループの任務場所はそれぞれ、図書館・名古屋大学駅・グリーンベルト両脇の道路（車を観察するため）・生協である。

任務の内容は他グループにはもらさず、別々に行動することが任務遂行の条件で、指令内容報告の補助ツールとして各グループにはデジタルカメラが1台ずつ手渡された。移動時間も入れた40分の任務時間終了後、教室に戻ってそれぞれが撮影して

きた画像をその場でパソコンに入れ、写真を見せながら、学習者が任務の内容・日本人へのインタビュー内容を報告した。発表の打ち合わせ・準備に10分を使い、発表時間は残り40分を使った。

各グループの実習生は、任務遂行中は補佐にまわり、発表時は学習者に合わせパソコンを操作し、写真を表示した。パソコンのセッティングはTAが行った。

<反省点>

教室で席に座っての授業とは異なり、学習者が能動的になれ、また学んだ文法を実践的に使える時間であったこのアクティビティは大変有益であった。

すべてのグループが、指定された場所において多くの写真を撮り、また周りの人へのインタビューも非常に積極的に行っていた。ミッションを終えての発表の時間では、実習生と協力しながら、グループで行った場所の写真や、インタビュー内容を発表した。各チームともそれぞれの個性溢れる発表で、他のグループの学習者や実習生、TAも熱心に耳を傾けていた。

今回のアクティビティにおける反省点としては、図書館などの公共施設でのインタビューや撮影には、事前の連絡や手続きが必要であったということが挙げられる。実習生が図書館の受付で、「課題」の紙を提示し、授業の一環であるということを説明したところ、「図書館にいる人の顔は写さないこと」「静かに行くこと」という条件付で許可をもらったが、これは当日ではなく、事前にミッションを決めた時点で行うべきであった。図書館グループの実習生の判断で、インタビューは図書館内ではなく、ロビーで休憩をしたり、新聞を読んだりしている人をお願いをした。みなさん協力的で、すぐ答えてくださり、学習者も有意義な活動をすることができたが、今後、このような活動をする際には、前日に該当施設などに打診、許可を取り付けた後、当日再度受付で断るという配慮をしなければならないであろう。

上述のような、事前準備が必要であったという点に関連して、アクティビティ全体として、TA・実習生間の綿密な摺り合わせがより必要であったということも反省点として挙げられる。今回のアクティビティのような、全体で行う授業においては、実習生一人ひとりが自主性を高めることはもちろんのこと、TA間、また実習生とTA間においても、さらなる連携が必要とされることは言うまでもないであろう。

4. まとめ

以上のように、今回の春季日本語教育実習を通して、日本語教師経験者、未経験者、母語話者、非母語話者、様々な視点から多様な気づきを得ることができた。

今回の学習者にとって、実習で扱う学習内容はすべて既習の項目であったが、どの学習者も熱心に取り組んでくださり、実習生には大変恵まれた状況下での実習となった。当初、春季休暇ということもあり、学習者の人数が減るのではないかと懸念されたが、むしろ、開始当初よりも人数が増える形で修了でき、大変嬉しいものとなった。

各実習生は TA や、他の実習生の授業を見学する機会を通して、多くの学びを得たのではないかと思う。また、日本語の授業中の姿だけでなく、学習者が詠んだ俳句、名古屋大学周辺探索などのアクティビティで楽しそうに日本語を使って表現している姿、日舞や浴衣を着て楽しんでいる姿など、様々な学習者の面が見られたことは日本語教師としてだけでなく、異文化や他言語を学ぶ者としても得るものがあったことと思う。

未経験者や非母語話者にとっては、本実習は初めての経験であり、研究との両立を考え、実習を決意するのに躊躇や不安もあっただろうが、実習生 2~3 名につき、1 名の TA がついて、親身になって相談に乗ってくださったので、安心して取り組むことができたのではないだろうか。

春季実習実施に際して御協力いただいた名古屋大学留学生センター、協力的かつ実習生に寛容だった「初級Ⅱb」クラス受講生のみなさん、実習生の自主性を重んじ、常に自信を失わせないように配慮してくださった TA の皆様、また、お忙しい中、各実習生の授業を見学して下さり、懇切丁寧なご指導をいただいた、名古屋大学鷺見幸美助教授に感謝の意を表すとともに心よりお礼申し上げます。

<宮島良子>